

刺青（谷崎潤一郎）

其れはまだ人々が「愚」と云う貴い徳を持つて居て、世の中が今のように激しく軋み合わない時分であつた。殿様や若旦那の長閑な顔が曇らぬように、御殿女中や華魁の笑いの種が盡きぬようにと、饒舌を売るお茶坊主だの幫間だのと云う職業が、立派に存在して行けた程、世間がのんびりして居た時分であつた。女定九郎、女自雷也、女鳴神、——当時の芝居でも草双紙でも、すべて美しい者は強者であり、醜い者は弱者であつた。誰も彼も挙つて美しからんと努めた揚句は、天稟の体へ絵の具を注ぎ込む迄になつた。芳烈な、或は絢爛な、線と色とが其の頃の人々の肌に躍つた。馬道を通うお客は、見事な刺青のある駕籠舁を選んで乗つた。吉原、辰巳の女も美しい刺青の男に惚れた。博徒、鳶の者はもとより、町人から稀には侍なども入墨をした。時々両国で催される刺青会では参会者おのゝ肌を叩いて、互に奇抜な意匠を誇り合い、評しあつた。

清吉と云う若い刺青師の腕きゝがあつた。浅草のちやり文、松島町の奴平、こんこん次郎などにも劣らぬ名手であると持て囃されて、何十人の人の肌は、彼の絵筆の下に絛地となつて擴げられた。刺青会で好評を博す刺青の多くは彼の手になつたものであつた。達磨金にはばかい刺が得意と云われ、唐草権太は朱刺の名手と讃えられ、清吉は又奇警な構図と妖艶な線とで名を知られた。

もと豊国国貞の風を慕つて、浮世絵師の渡世をして居たゞけに、刺青師に墮落してからの清吉にもさすが畫工らしい良心と、鋭感とが残つて居た。彼の心を惹きつける程の皮膚と骨組みとを持つ人

でなければ、彼の刺青を購う訳には行かなかつた。たまく描いて貰えるとしても、一切の構図と費用とを彼の望むがまゝにして、其の上堪え難い針先の苦痛を、一と月も二た月もこらえねばならなかつた。

この若い刺青師の心には、人知らぬ快樂と宿願とが潜んで居た。彼が人々の肌を針で突き刺す時、真紅に血を含んで脹れ上る肉の疼きに堪えかねて、大抵の男は苦しき呻き声を発したが、其の呻きごえが激しければ激しい程、彼は不思議に云い難き愉快を感じるのであつた。刺青のうちでも殊に痛いと言われる朱刺、ぼかしぼり、——それを用うる事を彼は殊更喜んだ。一日平均五六百本の針に刺されて、色上げを良くする為め湯へ浴つて出て来る人は、皆半死半生の体で清吉の足下に打ち倒れたまゝ、暫くは身動きさえも出来なかつた。その無残な姿をいつも清吉は冷やかに眺めて、

「嗚お痛みでがしようなあ」

と云いながら、快さそうに笑つて居る。

意気地のない男などが、まるで知死期の苦しみのように口を歪め歯を喰いしぼり、ひいゝと悲鳴をあげる事があると、彼は、

「お前さんも江戸っ児だ。辛抱しなさい。——この清吉の針は飛び切りに痛えのだから」

こう云つて、涙にうるむ男の顔を横目で見ながら、かまわず刺つて行つた。また我慢づよい者がグツと胆を据えて、眉一つしかめず恠えて居ると、

「ふむ、お前さんは見掛けによらねえ突つ張者だ。——だが見なさい、今にそろゝ疼き出して、どうにもこうにもたまらないやうにならうから」

と、白い歯を見せて笑つた。

彼の年来の宿願は、光輝ある美女の肌を得て、それへ己れの魂を刺り込む事であった。その女の素質と容貌とに就いては、いろいろの注文があった。啻に美しい顔、美しい肌とのみでは、彼は中々満足する事が出来なかった。江戸中の色町に名を響かせた女と云う女を調べても、彼の気分に適った味わいと調子とは容易に見つからなかった。まだ見ぬ人の姿かたちを心に描いて、三年四年は空しく憧れながらも、彼はなお其の願いを捨てずに居た。

丁度四年目の夏のとあるゆうべ、深川の料理屋平清の前を通りかゝった時、彼はふと門口に待つて居る駕籠の簾のかけから、真っ白な女の素足のこぼれて居るのに気がついた。鋭い彼の眼には、人間の足はその顔と同じように複雑な表情を持つて映った。その女の足は、彼に取つては貴き肉の宝玉であった。拇指から起つて小指に終る繊細な五本の指の整い方、絵の島の海辺で獲れるうすべに色の貝にも劣らぬ爪の色合い、珠のような踵のまる味、清冽な岩間の水が絶えず足下を洗うかと疑われる皮膚の潤沢。この足こそは、やがて男の生血に肥え太り、男のむくろを蹈みつける足であった。この足を持つ女こそは、彼が永年たずねあぐんだ、女の中の女であろうと思われた。清吉は躍りたつ胸をおさえて、其の人の顔が見たさに駕籠の後を追いかけたが、二三町行くと、もう其の影は見えなかった。

清吉の憧れごとちが、激しき恋に變つて其の年も暮れ、五年目の春も半ば老い込んだ或る日の朝であった。彼は深川佐賀町の寓居で、房楊枝をくわえながら、錆竹の濡れ縁に萬年青の鉢を眺めて居ると、庭の裏木戸を訪うけはいがして、袖垣のかけから、ついぞ見馴れぬ小娘が這入つて来た。

それは清吉が馴染の辰巳の藝妓から寄こされた使の者であった。

「姐さんから此の羽織を親方へお手渡しつて、何か裏地へ絵模様を畫いて下さるようにお頼み申せて……」

と、娘は鬱金の風呂敷をほどいて、中から岩井杜若の似顔畫のたとうに包まれた女羽織と、一通の手紙とを取り出した。

其の手紙には羽織のことをくれぐれも頼んだ末に、使の娘は近々に私の妹分として御座敷へ出る筈故、私の事も忘れずに、この娘も引き立て、やつて下さいと認めてあつた。

「どうも見覚えのない顔だと思つたが、それじゃお前は此の頃此方へ来なすつたのか」

こう云つて清吉は、しげくと娘の姿を見守つた。年頃は漸う十六か七かと思われたが、その娘の顔は、不思議にも長い月日を色里に暮らして、幾十人の男の魂を弄んだ年増のように物凄く整つて居た。それは国中の罪と財との流れ込む都の中で、何十年の昔から生き代り死に代つたみめ麗しい多くの男女の、夢の数々から生れ出づべき器量であつた。

「お前は去年の六月ごろ、平清から駕籠で帰つたことがあろうがな」
こう訊ねながら、清吉は娘を縁へかけさせて、備後表の台に乗つた巧緻な素足を仔細に眺めた。

「えゝ、あの時分なら、まだお父さんが生きて居たから、平清へもたびくまいりましたのさ」

と、娘は奇妙な質問に笑つて答えた。

「丁度これで足かけ五年、己はお前を待つて居た。顔を見るのは始めてだが、お前の足にはおぼえがある。——お前に見せてやりたいものがあるから、上つてゆっくり遊んで行くがいゝ」

と、清吉は暇を告げて帰ろうとする娘の手を取つて、大川の水に臨

む二階座敷へ案内した後、巻物を二本とり出して、先ず其の一つを娘の前に繰り展^{ひろ}げた。

それは古の暴君紂^{ちゆう}王^{おう}の寵妃^{ちゆうひ}、末喜^{まつき}を描いた絵であつた。瑠璃珊瑚^{るりさんご}を鑲^{ちりば}めた金冠^{きんくわん}の重さに得^え堪^かえぬなやかな体を、ぐったり勾欄^{こうらん}に靠^{もた}れて、羅綾^{らりよう}の裳裾^{もすそ}を階^{きざし}の中段^{ちゆうかん}にひるがえし、右手に大杯^{だいはい}を傾^{かた}けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲^{いけにえ}の男を眺めて居る妃^きの風情^{ふうせい}と云い、鉄^{てつ}の鎖^さで四肢^{しし}を銅柱^{どうちゆう}へ縛^ゆいつけられ、最後の運命^{うんめい}を待ち構^{くま}えつゝ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云い、物凄^{ものひろ}い迄^{まで}に巧に描かれて居た。

娘は暫くこの奇怪な絵の面^{おもて}を見入つて居たが、知らず識らず其の瞳^{ひとみ}は輝^{きら}き其の唇^{くちべ}は顫^{ふる}えた。怪しくも其の顔はだんくゝと妃の顔に似通^{にがよ}つて来た。娘は其処^{そこ}に隠^{かく}れたる真^まの「己^{おのれ}」を見出した。

「この絵にはお前の心が映つて居るぞ」

こう云つて、清吉は快^{こころよ}げに笑いながら、娘の顔をのぞき込んだ。

「どうしてこんな恐ろしいものを、私にお見せなさるのです」

と、娘は青褪^{あおざ}めた額^{ひたい}を擡^{もた}げて云つた。

「この絵の女はお前なのだ。この女の血がお前の体に交つて居る筈^{はず}だ」

と、彼は更に他の一本の畫幅^{えきぶ}を展^{ひろ}げた。

それは「肥料」と云う畫題^{えだい}であつた。畫面の中央に、若い女が桜の幹^{みづき}へ身を倚^よせて、足下に累々^{たふ}と斃^{たお}れて居る多くの男たちの屍骸^{むくろ}を見つめて居る。女の身辺^{みへん}を舞いつゝ、凱歌^{かいどき}をうたう小鳥の群、女の瞳^{ひとみ}に溢^{あふ}れたる抑^{おさ}え難^{がた}き誇^ほりと歎^{なげ}びの色。それは戦^{たたか}の跡^{あと}の景色か、花園^{はなぞの}の春の景色か。それを見せられた娘は、われとわが心の底に潜^{ひそ}んで居た何物かを、探^{たづ}りあてたる心地であつた。

「これはお前の未来を絵に現^{あらわ}したのだ。此処に斃^{たお}れて居る人達は、

皆これからお前のために命を捨てるのだ」

こう云つて、清吉は娘の顔と寸分^{すんぶん}違^{ちが}はぬ畫面の女を指さした。

「後生^{ごせう}だから、早く其の絵をしまつて下さい」

と、娘は誘惑^{ゆうわく}を避けるが如く、畫面に背^{そむ}いて疊^{たた}の上へ突俯^{つづぶ}したが、やがて再び唇^{くちべ}をわなゝかした。

「親方、白^{しろ}伏^ふします。私はお前さんのお察し通り、其の絵の女のよ^ような性分^{せいぶん}を持つて居ますのさ。——だからもう堪忍^{かんにん}して、其れを引^ひつ込^こめてお呉^{くれ}んなさい」

「そんな卑怯^{ひせつ}なことを云わずと、もつとよく此の絵を見るがいゝ。それを恐ろしが^{おそ}るものも、まあ今のうちだろうよ」

こう云つた清吉の顔には、いつもの意地の悪い笑いが漂^{よど}つて居た。然^{しか}し娘の頭^{づむり}は容易^{やす}に上^あらなかつた。襦袢^{じゆばん}の袖^{そで}に顔を蔽^{おほ}うていつまでも突俯^{つづぶ}したまゝ、

「親方、どうか私を帰^{かへ}しておくれ。お前さんの側に居るのは恐ろしいから」

と、幾度か繰^{くり}り返^{かへ}した。

「まあ待ちなさい。己^{おのれ}がお前を立派な器量^{きりやう}の女にしてやるから」

と云いながら、清吉は何気なく娘の側に近寄^{きよ}つた。彼の懷^{こころ}には嘗^{かつて}て和蘭^{わらん}医^いから貰^{もら}つた麻睡^{まし}剤^{ざい}の壘^{たい}が忍^{しの}ばせてあつた。

日はうらゝかに川面^{がわ}を射^さて、八疊^{やう}の座敷^{ざしき}は燃えるように照^てつた。水面^{すいめん}から反射^{はんし}する光線^{くわんせん}が、無心に眠る娘の顔や、障子^{しょうし}の紙^しに金色^{こんじき}の波紋^{なもん}を描^えいてふるえて居た。部屋^{へや}のしきりを閉^たて切^きつて刺青^{さしえ}の道具^{どうぐ}を手にした清吉は、暫^{しばらく}くは唯^{ただ}恍惚^{うつつと}としてすわつて居るばかりであつた。彼は今始めて女の妙^{みょう}相^{さう}をしみぐ味^{あじ}わう事^{こと}が出来た。その動かぬ顔に相對^{たいたい}して、十年百年この一室^{いつしつ}に静坐^{じやうざ}するとも、なお飽^あく

ことを知るまいと思われた。古のメンフィスの民が、莊嚴なる埃及の天地を、ピラミッドとスフィンクスとで飾ったように、清吉は清浄な人間の皮膚を、自分の恋で彩ろうとするのであった。

やがて彼は左手の小指と無名指と拇指の間に挿んだ絵筆の穂を、娘の背にねかせ、その上から右手で針を刺して行つた。若い刺青師の靈は墨汁の中に溶けて、皮膚に滲んだ。焼酎に交せて刺り込む琉球朱の一滴々は、彼の命のしたゝりであった。彼は其処に我が魂の色を見た。

いつしか午も過ぎて、のどかな春の日は漸く暮れかゝつたが、清吉の手は少しも休まず、女の眠りも破れなかつた。娘の帰りの遅きを案じて迎いに出た箱屋迄が、

「あの娘ならもう疾うに歸つて行きましたよ」

と云われて追い返された。月が対岸の土州屋敷の上にかゝつて、夢のような光が沿岸一帯の家々の座敷に流れ込む頃には、刺青はまだ半分も出来上らず、清吉は一心に蠟燭の心を掻き立てゝ居た。

一点の色を注ぎ込むのも、彼に取つては容易な業でなかつた。さす針、ぬく針の度毎に深い吐息をついて、自分の心が刺されるように感じた。針の痕は次第々々に巨大な女郎蜘蛛の形象を具え始めて、再び夜がしらゝくと白み初めた時分には、この不思議な魔性の動物は、八本の肢を伸ばしつゝ、背一面に蟠つた。

春の夜は、上り下りの河船の櫓声に明け放れて、朝風を孕んで下る白帆の頂から薄らぎ初める霞の中に、中洲、箱崎、靈岸島の家々の藁がきらめく頃、清吉は漸く絵筆を擱いて、娘の背に刺り込まれた蜘蛛のかたちを眺めて居た。その刺青こそは彼の生命のすべてであつた。その仕事をなし終えた後の彼の心は空虚であつた。

二つの人影は其のまゝ、稍々暫く動かなかつた。そうして、低く、か

すれた声が部屋の四壁にふるえて聞えた。

「己はお前をほんとうの美しい女にするために、刺青の中へ己の魂をうち込んだのだ、もう今からは日本国中に、お前に優る女は居ない。お前はもう今迄のような臆病な心は持つて居ないのだ。男と云う男は、皆なお前の肥料になるのだ。……」

其の言葉が通じたか、かすかに、糸のような呻き声が女の唇にのぼつた。娘は次第々々に知覚を恢復して来た。重く引き入れては、重く引き出す肩息に、蜘蛛の肢は生けるが如く蠕動した。

「苦しかろう。体を蜘蛛が抱きしめて居るのだから」

こゝう云われて娘は細く無意味な眼を開いた。其の瞳は夕月の光を増すように、だんくんと輝いて男の顔に照つた。

「親方、早く私に背の刺青を見せておくれ、お前さんの命を貰つた代りに、私は嘸美しくなつたらうねえ」

娘の言葉は夢のようであつたが、しかし其の調子には何処か鋭い力がこもつて居た。

「まあ、これから湯殿へ行つて色上げをするのだ。苦しかろうがちツと我慢をしな」

と、清吉は耳元へ口を寄せて、労わるように囁いた。

「美しくさえなるのなら、どんなにでも辛抱して見せましようよ」と、娘は身内の痛みを抑えて、強いて微笑んだ。

「あゝ、湯が滲みて苦しいこと。……親方、後生だから私を打つ捨て、二階へ行つて待つて居てお呉れ、私はこんな悲惨な態を男に見られるのが口惜しいから」

娘は湯上りの体を拭いもあえず、いたわる清吉の手をつきのけて、激しい苦痛に流しの板の間へ身を投げたまゝ、魘される如くに呻い

た。氣狂じみた髪が悩ましげに其の頬へ乱れた。女の背後には鏡台が立てかけてあった。真つ白な足の裏が二つ、その面へ映って居た。昨日とは打って変った女の態度に、清吉は一と方ならず驚いたが、云われるまゝに独り二階に待つて居ると、凡そ半時ばかり経って、女は洗い髪を両肩へすべらせ、身じまいを整えて上つて来た。そうして苦痛のかげもとまらぬ晴れやかな眉を張って、欄干に靠れながらおぼろにかすむ大空を仰いだ。

「この絵は刺青と一緒にお前にやるから、其れを持ってもう帰るがい」

こう云つて清吉は巻物を女の前にさし置いた。

「親方、私はもう今迄のような臆病な心を、さりと捨て、しまいました。——お前さんは真先に私の肥料になつたんだねえ」

と、女は剣のような瞳を輝かした。その耳には凱歌の聲がひびいて居た。

「帰る前にもう一遍、その刺青を見せてくれ」

清吉はこう云つた。

女は黙つて頷いて肌を脱いだ。折から朝日が刺青の面にさして、女の背は燦爛とした。